

追跡 2010

▶4

浜名湖のボート転覆事故から半年がたった12月下旬、亡くなった西野花菜さん(当時12)の自宅(豊橋市)の一室は友だちからの手紙やプレゼントであふれていた。その中心にある写真の中で、花菜さんがほほ笑んでいる。事故で心に傷を負った友だちも次第に自宅まで来るようになった。写真の前でおしゃべりし、帰り際に「また来るね」と声を掛けてくれる。両親にとって唯一、心が癒やされる瞬間という。

浜名湖のボート転覆事故

【浜名湖のボート転覆事故】 荒天の浜名湖で6月18日、県立三ヶ日青年の家(浜松市北区)に自然体験活動に訪れていた豊橋市立草南中の1年生18人と教諭2人が乗ったボートがえい航中に転

覆し、西野花菜さん(当時12)が死亡した。細江署は業務上過失致死容疑で青年の家や県、学校関係者から聴取を進め、県教育委員会は再発防止に向けてマニュアル作成などに取り組んでいる。



花菜さんの自宅に届けられた友人たちからのプレゼントや手紙—20日、豊橋市杉山町

娘の死 無駄にするな

は当時の心境を振り返る。それは事故から半年たった今も変わらない。いまだ事故現場を訪れることができず、湖や川を見るのも怖くてたまらない。

それでも父親の友章さん(51)は署名活動などで活発に動き、マスコミの取材にも応じてきた。「花菜が生きていたことを忘れないでほしい」という思いとともに、教育現

場、特に学校側の事故後の対応への不信任感が根底にある。県教委などは事故を受け、ほかの県立の青少年教育施設の安全対策も見直した。事故が起きた三ヶ日青年の家では

一部の陸上プログラムを11月から再開。現在は浜名湖周辺のマリナー関係者も加わり、海上プログラムの安全対策に力を注ぐ。

友章さんは、県や青年の家の姿勢を「事故を真剣に受け止めていると評価する一方、豊橋市教委に対しては「当事者意識がなく責任から逃れようとしているよう」と不満を隠さない。学校の問題として事故はなぜ起きたのか真剣に考え、現場の教諭の安全意識を変えない限り、事故はまた起こるとすら感じている。「私たちが娘の命を預けたのは学校」との思いは強い。

「命を大切に
にする学校現
場でどうして
命が失われた

のか今も分からないまま。事故に至った経緯はどんなことでも知りたい」と友章さん。

娘の死を無駄にしない。願いが形になるまで時間は事故から止まったままだ。

年の瀬を迎え、三河地方を担当する記者たちはこの一年、さまざまな取材現場を駆けめぐった。事件事故では遺族や被害者の悲しみや怒りに接した。厳しい経済情勢が続く中、地域の発展のために取り組む人たちの姿に心を打たれた。取材ノートから二〇一〇年を振り返った。

記者ノート 二〇一〇年を振り返って



「かなのプレゼント何にしよう」「きょう試験終わったよ」

ピンクの真新しい携帯電話に、浜名湖のボート事故で亡くなった西野花菜さん(当時二二)あてのメールが届く。送り主はクラスや吹奏楽部の友人ら。母親の光美さんは、この携帯電話を大切に持ち歩いている。

事故から半年。節目に合わせて両親に会い、思いを聞くことができた。一人娘を亡くした悲しみ、苦しみ、豊橋市への不信感…。携帯電話のエピソードでは、携帯画面をいとおしそうに見つめる両親の表情が心に残った。

① 浜名湖ボート事故



光美さんと花菜さんの友人がメールのやりとりをする携帯電話。ストラップは花菜さんの友人から贈られた

原因究明 遺族の願い

花菜さんが中学に入つた四月。「ケータイがほ

しい」「中間テストで良い点だったら買ってあげる」。父親の友章さん(五)は、娘とこんな会話をしたことを覚えてい

る。花菜さんは懸命に勉強し、いい成績をあげた四月。「ケータイがほ

しい」「中間テストで良い点だったら買ってあげる」。父親の友章さん(五)は、娘とこんな会話をしたことを覚えてい

る。花菜さんは懸命に勉強し、いい成績をあげた四月。「ケータイがほ

しかし、約束は果たせなかった。花菜さんの誕生日を少し過ぎた九月下旬、両親は約束通り携帯電話を買い、メールアドレスを花菜さんの友人に教えた。その後、母親の光美さんが花菜さんの代わりを務めるメールのやりとりが始まった。待ち受け画面と着信音は、花菜さんと同名の女性歌手西野力ナさん。同

浜名湖ボート転覆事故 荒天の浜松市の浜名湖で6月18日夕、野外教育活動をしていた豊橋市章南中1年生18人と教諭2人が乗った手こぎボートがえい航中に転覆、西野花菜さんがおぼれて死亡した。静岡県警は、主催した施設職員や学校関係者から事情聴取し、業務上過失致死容疑で捜査を進めている。花菜さんの両親は街頭で署名を集め、豊橋市議会に事故の真相究明を求める請願を提出。議会は12月16日、請願を趣旨採択した。

友章さんは、花菜さんの遺影の前で声を振り絞った。「毎日寂しくて、悔しくて。娘を失った痛みが薄れることは絶対ない。なぜ事故は起きたのか。市が真摯に事実に向き合って初めて対策ができる。娘の死を無駄にしないほしい」

(豊橋総局・池内琢)

浜名湖ボート事故 豊橋の中1死亡

回顧 2010

愛知 ②

「医者になりたい」
西野花菜さん(当時12)は
浜名湖での転覆事故で亡くな
る前日の6月17日、体験学習
のしおりに、両親にも話した
ことがない夢を記していた。
事故から1カ月半後、個別
取材に応じてくれた父・友章
さん(51)と母・光美さんはバ
イオリンを弾く花菜さんの写
真を見せてくれた。吹奏楽部
に所属し、両親には「音楽を
教える人になりたい」と語っ
ていた。病気がちだった光美
さんの入院に付き添ううちに
医師に憧れるようになってい
たようだ。残されたしおりを
前に、「こんなことを考える
まで成長していたなんて…
…」と光美さんは涙ぐんだ。

夫妻は、再発防止を願って
きた。だが10月、「豊橋市教
育委員会にはその姿勢が見え
ない」として会見を開き、市
議会に「再発防止」の請願を
するため、署名活動も始め
た。報道陣の前に出ることに
ためらいはあったが、「この
ままだと花菜の死が無駄にな
ってしまう」と決断した。
豊橋市教委は当初、事故の
分析結果を公にすることはお
ろか、文書にまとめることす
ら考えていなかった。11月下
旬になって再発防止策を市議
会に提出する。その内容は
「三ヶ日青年の家に改善を申
し入れる」など、「当事者とは
思えない」(友章さん)文
言が並んでいた。章南中が、
(ボート訓練を主催した)施
設の下見をどのようにしたか
具体的な記述すらなかった。
表題こそ「ボート転覆事故
を教訓とした校外学習(行
事)の安全管理体制の整備に
向けて」になっていたが、事

市教委対応まるで「他人事」

故と向き合い、教育現場とし
て問題点を洗い出そうとする
姿勢は感じられなかった。
国土交通省港湾局で勤務し
た経験を持つ佐原光一豊橋市
長は定例会見で、「三ヶ日青
年の家に風向計、風速計がな
いことに触れられていない」
などと、9月に静岡県教委が
まとめた報告書の難点を指摘
した。それだけの専門的知識
と視点がありませんが、なぜ豊

橋市教委の文書には反映され
なかったのだろうか。「やつ
てないことは真摯に反省して
たい。」(山田雄介)

浜名湖ボート事故 6月18日、荒天の静岡県浜名
湖で、野外体験学習をしていた豊橋市立章南中学校の
1年生18人と教諭2人の乗った手こぎボートが引航中
に転覆、西野花菜さんが水死した。静岡県警は、ボー
ト訓練を主催した県立三ヶ日青年の家の指定管理者
「小学館集英社プロダクション」の担当者や学校関係
者を業務上過失致死容疑で捜査している。一方、花菜
さんの両親は街頭で署名を集めて、11月には豊橋市議
会に「原因調査」と「再発防止」の請願をした。



発表会でバイオリンを演奏する11歳の頃の西
野花菜さん＝西野友章、光美さん夫妻提供

浜名湖ボート転覆事故

娘思い 交わすメール

日々発生する事件、事故。巻き込まれた人々の悲しみ。困難を乗り越えようとする苦悩、そして成功の喜び。記者たちは県内各地を巡り、たくさんの人と触れ合ってきました。気が付けば、イルミネーションに彩られた街に冷たい風が吹いています。記者たちが、心に降り積もった思いを「えんぴつ日記」に記します。

事故から8日後の6月26日、私は湖のほとりに立った。浜松市の浜名湖で豊橋市立章南中の1年生たちが乗った手こぎボートが転覆し、西野花菜さん(当時12歳)が亡くなった。久しぶりの外勤記者として豊橋に赴任し、2カ月半がたった時に事故は起きた。私の家族は浜松に暮らす。豊橋、浜松という二つの「わが町」を普段行き来する時、何げなく車窓から眺めていたのが、この浜名湖だった。

私は、一人息子が中学1年の時に50歳になった。花菜さんの父、友章さんは現在51歳。事故から半年たった今月初め、日常を取り戻すには短すぎるが、祈りの日々の中で暮らす両親に、花菜さんの写真の前で向かい合えた。

「携帯電話がほしい」「中間テストでいい成績を取ったら買ってあげる」。親子でそんな会話を交わしていたころの出来事だったと、友章さんは振り返る。

「6カ月たっても変わらないう。風呂に入ったり、車に乗ったり、買い物したり……」。そんな時、花菜さんがいない。「さびしい、悔しい気持ちが生続くのかなど。友章さんは今でも、海やボートの映像を見られない。浜名湖はおろか、豊橋から東へ行くことさえ苦痛に感じる。

母親の光美さんは、9月の花菜さんの誕生日前に買った携帯電話を、肌身離さず持っている。花菜さんは1学期の

中間テストで、頑張ってたもいい成績を上げた。遅くだったが、2人は約束を果たしたのだという。

この携帯電話の待ち受け画面は、歌手の西野カナさん。同級生が設定してくれた。花菜さんは西野カナさんのファンの。そのお陰で「みんな(自分の)名前をすぐに覚えてくれる」と生前、話していたのだという。時々、同級生から携帯にメールが入る。クラスの席替えて花菜さんの席がど

こになったなどといった、学校の「世間話」だ。光美さんは、娘と他愛のない会話をするようにメールを返す。

これが、2人が淡々と語る「今」だった。周りが少しずつ2人に勇気を与え、一歩ずつ前に向かって進んでいるように、私には感じられた。「うちの息子は中学、高校が実はボート部で、時々浜名湖で合宿していたんですよ。そんな世間話を私が花菜さんの両親とできる日も早く、と祈った。

【沢田均】
〆つづく



ボート事故が起き、花菜さんの命が奪われた浜名湖。向こう岸の建物は、生徒たちが宿泊していた「静岡県立三ヶ日青年の家」

えんぴつ日記

□□□1